

水平の川、垂直の川

——川を描いた児童文学を読む——

奥山 恵

個人的なことでは恐縮だが、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』への興味が高じて、作品の舞台となつているミシシッピー川を旅したことがある。実際の

川の大きさやその流れを眺めつつ作品を読み返しながら、改めて、この作品にとって、ミシシッピー川が舞台であることは、他に代えがたい意味をもつと実感した。同様に、川をよく知り、川を描いた作家は……と世界の児童文学を見渡したとき、たとえば、イギリスのフィリパ・ピアスにとつてもまた、川は重要な意味をもつ場所ではないかと思う。では、日本の作品においては、川はどのように描かれているのだろうか。それもまた、気になるところだ。

作品にとって、その舞台となる場所をどこに設定するかは全体の雰囲気や方向性を決める重要な要素である。本稿では、物語の場（WHERE）を考える端緒として、川を描いた児童文学を読み直してみた。まずは、すでに述べた二人の作家がどんなふう川を描いたかを確認してみよう。

穏やかで美しいトウェインの川

トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』（二八八五原作、引用は千葉茂樹訳、二〇二一、岩波少年文庫版）は、『トム・ソーヤーの冒険』（一八七六原作）の続編と言われている。しかし、この二作品における川の描き方は、じつはかなり違う。二作とも、ミシシッピー川中流の街セント・ピーターズバーグを舞台として始まるが、『トム：』は、ほぼその街の中だけで、物語は完結している。一方の『ハック：』は、ひきとられたダグラス未亡人の家での窮屈な暮らしにも、のんだくれで虐待をくりかえす父親との暮らしにも耐えかねて、まずミシシッピー川の中州のジャクソン島に逃げる。そこで、逃亡奴隷のジムと出会い、いっしょに自由州をめざして、ミシシッピー川を下っていく。物語の中心は、まさに川の旅そのものだ。

川沿いの街セントピーターズバーグは、マーク・トウェインが四歳から過ごしたハンニバルという街がモデルとな